

愛・地球博20祭 未来共想フォーラムⅤ

愛知からの問いかけ「自然の叡智」とアート

未来共想フォーラムのしめくりは芸術をとりあげる。国際芸術祭あいち2025が開幕するこの時に、(広義の)教育や、博物館・美術館、そしてEXPOの役割にも光を当てながら、これからの自然と芸術のかかわりについて議論したい。愛・地球博の理念は色あせることはない。

◇タイトルと登壇者/パネリスト紹介◇

『芸術と自然を架橋する: 共感のキュレーション』

長谷川 祐子(京都大学経営管理大学院客員教授 / 前金沢21世紀美術館館長/東京芸術大学名誉教授)



キュレーター/近現代美術史。フランスで日本文化を紹介した「ジャポニスム 2018: 深みへー日本の美意識を求めて」展など世界各国で数々の国際展を企画してきた。文化庁長官表彰(2020年)、フランス芸術文化勲章オフィシエ(2024年)などを受賞。主な著書に『新しいエコロジーとアート』ほか。

金沢21世紀美術館の特別展示『すべてのものとダンスを踊ってー共感のエコロジー』、アートディレクターとして企画した『森の芸術祭』の出展作品を中心に、自然の叡智をアーティストがどのように表現したか紹介し、そのうえで、キュレーションの役割と意義について語りたい。

「芸術は自然に対して何ができるか」

ハナムラ チカヒロ(大阪公立大学准教授)



専門のトランスケープ論を元に、環境芸術・空間アートの制作や映像制作なども行う。大規模病院での空間アート「霧はれて光きたる春」で第1回日本空間デザイン大賞受賞。主著に『まなざしのデザイン』(2017年、NTT出版、日本造園学会賞)、『まなざしの革命』(2022年、河出書房新社)など。

芸術は社会の具体的な問題に関わりながら人々の見方を変える力を持つことが認識され始めている。その一方で、深刻化する地球環境の問題に対して芸術に何ができるのだろうか。自身のこれまでの社会における芸術実践を踏まえ、我々の自然へのまなざしを変える可能性について考えたい。

「社会彫刻としてのユースキャンプ: 自然とアートの教育実践」

小貫 大輔(東海大学国際学部教授)



専攻は性教育。ハワイに3年、ブラジルに12年暮らし、10代妊娠、エイズ、自然分娩、初期の子ども時代支援などのプロジェクトに従事した後、2006年より現職。帰国後は、性教育のほか、日本のブラジル学校やシュタイナー学校などのオルタナティブ学校の支援に取り組んできた。

これまで試みてきた実践に基づき、感性を重視する多様な教育のあり方について論じる。国際ユースキャンプでは、年毎のテーマ(例: 2024年「ジェンダー」、2025年「ラテンアメリカと脱植民地主義」)を議論し、ダンス・音楽・巨大な絵の作成などを通じた「社会彫刻」を制作してきた。

「ミュージアムとEXPOに求められるこれからの役割」

稲村 哲也(野外民族博物館リトルワールド館長、愛知県立大学・放送大学名誉教授)



文化人類学、博物館学。アンデス、ヒマラヤ、モンゴルなどで先住民や牧畜民の調査研究に従事。リトルワールド開設(1983年)に携わり、約35年の大学教員を経て、2024年から現職。主著に『遊牧、移牧、定牧』、『レジリエンス人類史』、『博物館展示論』など。

これまでの文化人類学・博物館に関する実践をふまえ、愛・地球博20祭の「地球大交流・未来共想プロジェクト」をふりかえり、地球的課題に直面する現代社会・未来社会のために、ミュージアムとEXPOはどのような役割を果たすべきかについて考えてみたい。

◇コーディネーター◇



阿部 健一(総合地球環境学研究所名誉教授・上廣環境日本学センター客員教授)

日本の思想、日本人の自然観から地球環境問題への発信を行っている。愛・地球博では国際シンポジウム『持続可能な開発の媒介者たち』を企画・運営。また、国連環境計画「世界こども環境ポスターコンテスト」の審査員も務めた。